

## 慈悲の唄－竹部勝之進

お念仏のみ教えに生きた詩人・竹部勝之進（1905-1985）さんは、信心の喜びを多くの詩に残されました。

昭和48年に刊行された詩集『はだか』（法蔵館・廃刊）の中に次のような詩があります。

慈悲の唄

もったいないことです  
もったいないことです  
私一人は  
私一人は もう助からずとも  
よろしゅうございます  
もったいないことです  
もったいないことです

（\*原文はすべてカタカナです）

お念仏の深い味わいの出た詩です。

詩の中に「私一人は もう助からずともよろしゅうございます」という一節がありますが、これがこの詩のヤマです。

一般に私たちは救いを求める時、「他人はどうであれ、私一人は救われたい」と思うものです。ところが竹部さんは「私一人は助からなくても結構です」と、言っているのです。これは一体どうしたことでしょうか？  
なぜそのように言えるのでしょうか？

ここが浄土真宗の信を得る時の大きなポイントになるのです。

この言葉は決して捨てゼリフではありません。  
これは竹部さんの厳しい自己凝視の中から出た言葉です。

行商を営みながら妻子を養っていた竹部さんは、ふとしたことから曾我量深先生（元・大谷大学学長）にご縁を得て、お念仏の教えに出遭います。

愚かな者が、愚かなままに救われていく……このお念仏の教えに感動した竹部さんは、聞法にいそしみます。

その聞法の姿勢は、詩の冒頭の一節「もったいないことです もったいないことです」という思いを持ったものだったでしょう。

ところが、そうやって真剣に聞法を重ねれば重ねるほど、愚かで、どうしようもない己の姿が如実に浮き彫りにされるのです。

これが他宗にはない、お念仏の教えの特色です。

教えを聞いて、賢くなったり立派になったりするのではないのです。  
愚かな自分に目覚めていくことをお念仏は教えるのです。

大悲に包まれてもなお愚痴が口をついて出る、そんなお粗末な我が身に、竹部さんは思わず、「阿弥陀さま、もう放っておいて下さい。いくら愚かな者を救うとおっしゃられても、あまりにもあなたさまにお世話をかけすぎます。もう助からなくても結構です。このようなお粗末至極な私など見捨てて下さっていいのです」と申さずにはおれなかったのです。

しかし、そのように思い、そのように叫ぶ竹部さんを阿弥陀さまの大悲は倦むことなく照らし続けて下さるのです。背いても背いても決して見放そうとしないのです。

この「<sup>むがい</sup>無蓋の大悲」とも呼ばれる阿弥陀さまの底知れぬお慈悲の温かさに、竹部さんは、

「これほどまでに尊いお慈悲でございましたか。こんな愚かな私を救うためのご本願でございましたか」と、心の底から頷くとともに、深い喜びをもって「もったいないことです もったいないことです」と申さずにはおれなかったのです。

救われようのない私であればこそ、間違いなく救いたもう大悲であったと絶唱するこの詩は、信を得た念仏者の喜びを表わした法悦の詩です。

竹部さんは次のように語っています。

「懺悔というのは自分ではできません。懺悔せざるをえない。そういう教えに出遇わしてもろうた。ありのまま、ありのままのわが身は恥ずかしいのだ。その恥ずかしいわが身がわかると、それはもう隠しようがない。ありのまま懺悔せずにおれない。その懺悔のところによるこびが湧き出てくる。よろこびが懺悔のところに溢れてくるんです・・・」  
まことにその通りです。

お念仏のみ教えは、ありのままの自分がさらけ出されます。

ありのままの私は、まことに恥ずかしい私ではありますが、そこには「だからこそ救わずにはおれないんだよ」という阿弥陀さまのこの上もなく温かい大悲のお心がはたらいているのです。

悲しみの懺悔の中に無上の喜びがあるのです。

おおき がんえい

正親含英先生（元・大谷大学学長）は、

「人間における一番大きな幸せは、愚かなるものよ、浅ましき業深きものよ、と言ってくれる人を持った人であり、その呼びかけに頷いていける人生が見つかった人である」と仰っていますが、以って瞑すべしです。

平成24年7月 「光明寺だより78号」より